ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える
市民懇談会（第５回）

平成 18 年 3 月 14 日（火）
19 時から 20 時 30 分
武蔵野総合体育館　大会議室

次　　第

１　配布資料説明
　ア）　日本武蔵野センター関係者の意見
　イ）　日本武蔵野センター利用者アンケート結果
　ウ）　日本武蔵野交流センター基本協定書等

２　市民意見に対する懇談会の意見について

３　懇談会報告書について

４　その他

1　日本武蔵野センターで行う日本語教室については、どのように評価していますか。

日本語教室は、市民と武蔵野が出会うきっかけ作りの役割を持っており、市民交流の輪がここを中心に広がっています。従って、もっとも枢要な根幹をなす事業である、と考えております。

2　センターで行う日本文化紹介のための行事をどのように評価していますか。

上記１を補完するもので、すでに武蔵野センターに来ている学生などの人々が、日本文化の先達として、知人・家族・友人をセンターに呼び込むための効果もあり、日本文化に触れたルーマニア人たちのデモンストレーションの場でもあり、武蔵野センターのメンバーとして招待され参加できる誇らしい場でもあります。勿論、イベントからセンターに関係に入ってくる人達もいます。

3　武蔵野市から市民団が訪問して文化交流等を進めたことについて、ブラショフ市民はどのように評価しているとお考えですか。

ブラショフ市民が、漠と描いている日本と日本人のイメージを自分の目で観察する事が出来、市民団が持ち込んでくる豊富な異文化の香り実感でき、大きな外的な刺激を受け取ってきた機会でもあったと、思います。

4　日本武蔵野センターがあることによって、ブラショフ市民にはどのようなメリットがあるとお考えですか。

実質的には、武蔵野センターはルーマニアでただ一つの体系だった日本文化センターです。また、ブラショフでは、常設の文化センターとして、ドイツ、フランスとともに活発な活動をしている事で知られています。日本語教室、イベントなどに参加でき、さらに市民が、日本について知りたいときに訪ねるべき場所、と言う認知を得ていると思います。

5　日本武蔵野センターの今後のあり方について、どのようなことが重要だとお考えですか。

さらに市民交流の層を広げる努力が必要だと思っています。社会人層、小中学生と父兄層、子育て世代の母親交流、学生交換交流など漸次推進し、幅広い異文化理解を両市民に訴えていく事が大切だと思います。

6　その他、武蔵野市とブラショフ市との交流全般について、ご意見をお願いいたします。

財政状況は相変わらず苦しいブラショフ市も、自助努力での改善と生き残りをかけて観光誘致などのビジョンの基に市街整備を急いでおり、その過程での食い違いも偶さかに起こりがちであるが、センターを橋頭堡として、武蔵野市は交流事業課、ＭＩＡなどが集約的に重複を廃して効率よく関わる事によって異文化市民交流をドライビング・フォースとして活用し、武蔵野市役所自体の国際化をも視野に入れながら、本事業の投資効果最大化を求めていくべきではないかと思います。

1　日本武蔵野センターで行う日本語教室については、どのように評価していますか。

ルーマニア国内で市民の交流レベルでの日本語教室を無料で開いているのは、武蔵野センターのみということもあり、他の日本語関係機関からの評価は高いと思います。また専任の日本語教師がクラスを担当するようになって、授業内容もきちんと計画的にされています。センターでの活動のメインが日本語クラスになりつつあると思います。

2　センターで行う日本文化紹介のための行事をどのように評価していますか。

小学生対象の文化紹介（おりがみ・歌）から、大人を対象とした文化講座まで、幅広く日本紹介をしています。各メディアにもその都度取り上げてもらっています。最近は宣伝も多くするようになり、広く知れ渡るようになったと思います。

3　武蔵野市から市民団が訪問して文化交流等を進めたことについて、ブラショフ市民はどのように評価しているとお考えですか。

今でも市民団やアクションと交流したブラショフ市民は、非常に交流の印象が強く残っていると思います。おそらく武蔵野市の市民団に関してもそうだと思います。機会があればより一層文化理解と交流を深めるような市民団の派遣を希望します。

4　日本武蔵野センターがあることによって、ブラショフ市民にはどのようなメリットがあるとお考えですか。

ルーマニアでは最近日本語の小説がルーマニア語に翻訳されたり、日本関係のテレビ放送があったりと、日本に触れる機会も多くなってきたと思います。そしてブラショフ市民は、センターでその興味を形ある何かに変えることができると思います。

5　日本武蔵野センターの今後のあり方について、どのようなことが重要だとお考えですか。

武蔵野市民の理解や積極的な参加。

6　その他、武蔵野市とブラショフ市との交流全般について、ご意見をお願いいたします。

ブラショフ市民が日本に行くことは、かなり難しいことです。しかし日本からブラショフに来ることは可能です。ブラショフ市民は日本についてもっと知りたいと思っている人が多く、ただなかなかその機会がないのも現状です。ルーマニアだからと言うわけではなく、今姉妹都市として友好関係持っているブラショフに来て、直接その目で見て姉妹都市のあり方、国際交流とは何かを考えていただく機会を見つけていただけるといいと思います。メリットという点では、「ブラショフとの交流で武蔵野市民のメリットは何か」を考えることも必要だと思います。

1　日本武蔵野センターで行う日本語教室については、どのような意義があるとお考えですか。

センターでの日本語教室の存在は、正に日本との繋がりとしての意義がある。言語がやはり第一。

2　センターで行う日本文化紹介のための行事は、どのような意義があるとお考えですか。

日本文化紹介行事の意義は、異なる文化に直接触れられるということ。

3　武蔵野市から市民団が訪問して文化交流等を進めたことについて、プラショフ市民はどのように評価しているとお考えですか。

市民団訪問は、とにかく具体的に彼等がわが文化に接し得る機会であり、評価は、極めて高いものがある。

4　日本武蔵野センターがあることによって、プラショフ市民にはどのようなメリットがあるとお考えですか。

センターの存在は、知識欲の優れて強い彼等にとって、大変なメリット。

5　日本武蔵野センターの今後のあり方について、どのようなことが重要だとお考えですか。

今後の在り方というか、最も必要なことは、現地での市当局との密接な連絡、つまり所長がやるべきことの第一の仕事。

6　その他、武蔵野市とプラショフ市との交流全般について、ご意見をお願いいたします。

所長は、やはりボランティアに戻すべきと思う。

0．初めに
指揮者曽我大介氏が起こした行動をきっかけとして始まった武蔵野市とルーマニア・ブラショヴ市との交流は、一定の成果を上げて現在に至っている。特に1995年から1997年の３年間に実施され、武蔵野市MIAからの派遣教師による日本語集中講座と、1996年から1998に行われた研修生招待事業は大きな成果を上げていると言える。３年間に亘った事業の招待者９人は１人を除き全員、現在何らかの形で日本語を日常的に使って業務ないしは勉学に従事している。
又、武蔵野市の事業を引き継いだ形で、2000年から始まった「武蔵野ブラショフ市民の会」の研修生招待事業はすでに６人の招待者を数え、両市の交流の大きな推進力となっている。
更に1999年12月に開所した日本武蔵野文化センター（現日本武蔵野センター）は翌年１月より日本人１名が常駐し、以来交流の拠点としての役割を果たしているといえる。
日本語教室については1995年から始まった活動は、一時の中断の後JICAによって引き継がれ、いくつかの問題が派生したものの、その後は武蔵野市よりの教師派遣によって正常な形となり現在に至っている。

総じて両市ならびに両市民の交流については一定の成果を上げているように見えるが、更なる発展に向けてはなお改善または考慮すべき点があると思われる。以下、開所当初から１年半その運営に関わってきた者としての立場から、貴課のご質問の項目に即してお答えしてみたい。

１．日本武蔵野センター（以下、Mセンター）による日本語教室について。
センター主催による日本語教室が始まってからまだ２年強と日が浅く、その間に交流の核となる人材が育っているとは言い難い。１コース週１回程度の講義では学習の成果は早急に得られるものではない。1995年からのMIAによる教室は選抜方式で短期ではあるが集中講義の形を取ったことにより、効果が上がったものと思われる。なお、1999年から始まって１年半に続いた最初のJICA派遣教師による日本語教室は１コース週２回行われていた。
交流の核となる人材を育成する事が日本語教室の第１の目的であるならば、それなりの方策を講じなければなるまい。例えば受講生は選抜制にするとか、有料制にするとか、短期集中講座方式を採るなどの方策が必要であろう。
しかしながら、私個人はMセンタが日本語教室を主催する主たる目的は、ブラショヴの学生市民に日本全般を紹介することにあると諒解（曲解？）しているので、上記の案は避けるべきと考えている。

２．日本語紹介のイヴェントについて。
開所した当初から行われてきたイヴェントはMセンターの行事として定着し、進め方も方式化して来たと感じているが、市民への浸透という点では、残念ながら未だしという感じがする。回数も当初の１年半ほどは半年に４～５回ほどのペースで行われていたが、ここ数年はそのペースが落ち、目新しさもなくなってマンネリ化の様相を呈し、参加する人の拡がりも少なく日本語教室の生徒の範囲に留まっているようである。
日本を紹介するアイテムや回数をもっと増やし、場所も時にはMセンター外に求め、市民に広くPRする方策を考えるべきである。

３．武蔵野市民団の交流について。
総じてルーマニア国民は日本について好意的であり、歴史が古い経済・文化大国として尊敬と憧憬を抱いている。従って、はるばる日本から訪問してきた人々に対して悪感情を持ったり、反発する筈もない。市民同士の交流についてはブラショヴ市民も大いに歓迎している。むしろ両国を理解し合う機会をもっと持つことが出来ないかと言う人は多い。但し一方で、文化はもういい、むしろ経済的な交流、援助が欲しいと話す人も結構いることは事実である。

4．ブラショヴ市民にとってのMセンターの存在意義について。

どのようなメリットがあるかと聞かれても何と答えるべきか。Mセンターについてのブラショヴ市民一般の受け取り方は、Mセンターすなわち日本語教室である。従って開所当初、Mセンターが目指していた日本紹介の中核たる文化総合センターとしては受け止められていないようである。従って、日本語学習を希望するブラショヴ市民にとっては、無料で気安く受講が出来るのは大きなメリットであろう。

また、日本に関する資料がこれほど揃っている施設はルーマニア内では他に見あたらない。

5．Mセンターの今後について。

a)本来の目的に沿った活動を活発にするためには、まず市民への広報にもっと力点を置くべきである。例えば、開所以来１年半にわたって" Gazeta Musashino" なる月刊誌を発行し、日本紹介、図書紹介やブラショヴの学生に書かせた記事を載せたりしてPRの一助としていたが、このような手段をもっと活用してはいかがか。また地元マスコミにもっと積極的にアピールして、Mセンターを取り上げてもらう事も必 要であろう。

b)Mセンターの１側面である図書館の、図書・視聴覚による日本紹介の資料の充実にもっと努めるべきではなかろうか。 最近はルーマニア語による日本紹介の資料がルーマニアの書店に多く見られるようになっている。これらを積極的に揃えてはいかがであろうか。これも開所当時に比べれば格段に多く発行されているが、Mセンターには2001年半ば以後あまり見かけない。

c)折角寄贈して頂いた10台のコンピュータがあまり活用されていない。初歩的なコンピュータ教室もさることながらソフト開発のための指導などに利用できるようにならないものか。（当初の目的はその辺にあった筈なのだが。）

d)現在のMセンターの運営については、ルーマニア側職員のジョルジアナの役割が大きいように見受けられる。この事は現地人による自主的運営の可能性を示している。勿論日本語教師は日本人である方がいいので、将来的には、日本語教師と現地人による２人体制での運営も視野に入れてもいいのではあるまいか。

e)残念ながら、現在のMセンターの立地条件はあまり良いとは言えない。目立たない所にあり、建物の構造上からも、一般の利用者は少なく、特定の利用者に偏ってしまっている嫌いがある。存続を前提とするならMセンターの立地条件を再検討する必要があると思われる。

6．両市の交流全般について。

ヨーロッパの一角に位置しているとは言え、ルーマニアは現在政治的にも経済的にも発展途上にあり、決して先進国とは言えない。本来、国同士の交流は、両者が対等の位置にあるべきだと、私は考えている。その観点に立つならば、極言すれば両市の現在の交流は実は先進国による発展途上国への援助とも言うべきものになっている。その上で、両市がどう対等の立場で真の交流が出来るのか考える必要があるが、私にもまだはっきりした回答がある訳ではない。

また、官主導ではなく市民主導の交流が主にならなければ、対等の交流が出来ないのではなかろうか。その意味では、両市の交流を望む市民団体が活動の主となり、官はそれを側面からサポートする形が本当は望ましいのではないかと考える。

日本語教室について言えば、ブラショヴの大学に拠点を移し、大学内に日本語の教科目を設置するとか、公開講座のような形で一般に開放する事も考えて見ても良いのではなかろうか。

また、武蔵野市内とブラショヴ市内の大学とで対等交換留学生制度を採り入れてみてはどうであろう。

X.最後に。

以上、こちらでの滞在体験とルーマニア人との対話をもとに、思いつくままMセンターと両市の交流のあり方について述べてみたが、やはり両市間の対等の関係が築かれて初めて、本当の意味での交流が実現し末長い友好が保たれるのではなかろうか。論議のご参考になれば幸いである。　　以　上

1）日本武蔵野センターで行う日本語教室については、どのように評価していますか。

日本語講座を評価するための指標は、量的な評価（出席率）及び質的な評価（クラスの雰囲気、クラス構造、講師に対する満足度）の組み合わせです。

初級クラスでは、第一学期において出席率がやや高いが、日本語の複雑さや参加者のスケジュールの不安定さなどといった様々な要因で出席率が次第に少なくなっていきます。中級日本語講座の参加者数は約２０％減り、上級レベルの受講者は非常に数少ないです。(現在の講座当たりの受講者数では、少ない人数にも係わらず、講師が多大なエネルギーや時間を費やさなければならない一方で、受講者は個人的ないわゆるマンツーマンレベルで指導を受けることができ、日本語取得の向上につながると考えられます。)

2）センターで行う日本文化紹介のための行事をどのように評価していますか。

日本文化プログラムの目的というのは、ブラショフ市民を相手に日本文化や日本文明に関して教えることと、参加者を楽しませることです。

量的（参加者数）とプログラムの質（内容、事前準備、係わる人材、マスコミの反応）を検討することで、これらのプログラムを評価できます。

日本文化プログラムに来られる人数はたいてい５０人程度で、会場の定員は７０人からすると、これは良い数字だと考えられます。

これほど大人数が参加すると、プログラムの内容や計画に満足していると想定することができます。多くの人数が参加してくださるように、ロールプレーやくじ引きや対話式や日本文化のエレメントを導入しています。ルーマニア人にとって新しく感じる、日本の伝統的な踊りやカラオケや漫画のエレメントも活用しています。

日本文化プログラムをもう一つの手段で評価できます。それは実際にプログラムに参加した方々が寄せていただいたコメントやご意見です。例として、２００４年にブラショフシティデーズと併せて主催した「着物パレード」では、多くの市民をはじめ、市長自らが大変良いイベントだったと好評でした。昨年の「七夕」には約６０人が参加し、多くの参加者は後日メール、電話、あるいは直接センターに来て、大変楽しいイベントだったと伝えてくださいました。また、今年の「ひなまつり」では、イベント終了後、イベントを評価する意見が寄せられました。しかし、日本文化プログラムにおいて参加者は男女老若で本当に様々な人たちが来られるので、必ずしも皆様を満足させることは容易ではありません。

一般的に言えばイベントを企画することは下記を意味します：
＊イベントの企画（日時、内容…）
＊宣伝物を作成（作成、印刷、配布）
＊マスコミへの呼びかけのための原稿作成や送付
＊関係者の募集と当日対応する体制の調整の計画
＊雑貨の買出し
これらの活動は時間、努力、そして人材を要します。日本武蔵野センターの限られたスタッフの中で、イベントの企画や組織をより効率的に推進するために、センターの講座受講者をできるだけ活用するようにしています。

3）武蔵野市から市民団が訪問して文化交流等を進めたことについて、ブラショフ市民はどのように評価しているとお考えですか。

武蔵野市民団訪問や日本文化紹介イベントは、下記の理由で多くのブラショフ市民を引き寄せました：

＊ 武蔵野市民と直接触れ合うことが出来ること。
＊ 日本文化を体験することが出来ること。

それと同時に、武蔵野市民はブラショフ市民をはじめ、ルーマニア国民に出会え、ブラショフについての理解・知識（自然、歴史、習慣、食べ物）を深めました。

大人数の参加者や高い質のある内容や武蔵野市とブラショフ市が係わることもあって、イベント自体がよく準備をされ、まとまっていたので、武蔵野市民団を高く評価することが出来ます。マスコミにも取り上げられ、今でも何人かの人々が「大変楽しいイベントだったし、もっと頻繁に行ってほしい」と私によく言います。

武蔵野市民団訪問は、世界文化の多様性を表し、そしてブラショフ市民の日本や日本文化に対する好奇心を満たさせていますので、ブラショフ市民やブラショフ市に歓迎されています。

4）日本武蔵野センターがあることによって、ブラショフ市民にはどのようなメリットがあるとお考えですか。

日本武蔵野センターがブラショフ市、それにましてルーマニアに位置することで、ブラショフ市の快適な暮らしに貢献するのみならず、ブラショフ市民、特にセンターの利用者の日本に対する理解度も豊かにしています。さらに、同センターはブラショフ市の社会、教育、精神、それに経済にも貢献しています。

同センターは、ブラショフ市民にとっての日本および日本文化の玄関口とも言えます。ブラショフに位置することで、ブラショフ市民に対してのメリットは日本文化紹介や日本語講座です。ブラショフ市民は無料で日本語講座に参加することができ、日本の情報にも無料でアクセスできます。同センターで勉強することで、市内の若者の国際的な視野を広げるばかりではなく、奨学金の取得、ルーマニアや海外で高給与の仕事に就くことにも効果が期待できます。

日本武蔵野センターは、市民のブラショフ市に対するイメージアップにもつながっています。
ルーマニアの各都市が国際協力の関係を強化して、日本の都市との同じような関係を締結することに強く望んでいます。同センターは、ルーマニアのほかの都市に同様の文化センター設立の出発点やモデルコンセプトにもなれると思います。

5）日本武蔵野センターの今後のあり方について、どのようなことが重要だとお考えですか。

A) <u>提供するサービス</u>

日本武蔵野センターが提供するサービスは、日本語講座、図書室、文化講座や日本文化プログラムです。今後に向けての戦略の一つとして、センターが提供するサービスの多様化および現在提供するサービスの向上だと考えられます。ルーマニア人と日本人（武蔵野市民）に対するそれぞれのサービスを提供することで同センターの活動を多様化させます。

現在の日本文化講座は、書道、着付け、茶の湯、そして漫画です。これらを引き続き提供すると思います。それに加えて、「絵手紙のクラス」と「生け花講座」（最も実施してほしいと言われるクラス）を再開するべきですが、この２つのクラスを指導していただく講師がいないことが現状です。

提案：一年間の中で、一ヶ月程度、日本人講師が指導する「絵手紙クラス」を実施することです。

１ヶ月クラスの一つか二つを行うことで、多くのブラショフ市民を引き寄せることができ、センターの財政的な支援にもつながると思われます。

今、私は、ブラショフ市民の関心度を高め、利用者増加にも効果的でセンターの財源となるクラス・活動を検討しているところです。それは、日本人講師が教える武術のクラスです。ただし、日本人講師と道場を要するため、設立にはやや難しいと思います。

武蔵野市民に対するサービスに関して、ルーマニア人（日本語講座受講者）家庭でのホームスティもできる、１０日間～１４日間程度のルーマニアの文化体験事業を開催することです。これで、武蔵野市民とブラショフ市民との友情関係をさらに深めます。直接触れ合うことで、ブラショフ市民とブラショフ市の日常生活が分かると共に、日本人もルーマニア人も自らの文化意識を強めることができ、共通体験のために両国が親密の関係を築くことも期待できます。

B) 人材・スタッフ

日本武蔵野センターのスタッフは、常識的できちんと教育を受けた、頼りのある、偏見のない、そしてそれぞれのスタッフが専門とする部門に干渉せず、軽視ぜずにいる人が求められます。

センター所長は、武蔵野市の代表者です。従って、所長は心が広くて、公正で、信頼できる、ルーマニアでの武蔵野市の評価を高めるるために国際業務に精通している方でなければなりません。また、その方は、ブラショフ市役所、センターのビル大家、諸機構や団体の代表者、その他に協力する方々に対してうまく接していかなければならないので、交渉力に優れている方が必要です。それから、最適な職場環境づくりに務めると共に、スタッフが協力し合うために職場の人間関係を大切にしなければなりません。

C) 財源

１）主要な財源は武蔵野市が提供することで、ブラショフ市役所の支援も得られます。
２）市民との連携づくりは財源にもつながります。
　ルーマニアの法律において、収入のある方が所得税の２％を NPO に割り当て寄付できる制度があり、現在、反応は大きくなくても、同センターの利用者に対して、制度の意識を高めることと共に、申請書を収集しています。
３）市民や団体から依頼された日本文化プログラムは、ときどき同センターの寄付金資源にもなれます。
４）ヨーロッパや日本の財団法人が提供する助成金事業を把握し、申請することが必要です。

D) その他の提案

その他の戦略というのは、活発的な交流事業の実施です。

＊ 日本語講座受講者に対して、武蔵野市国際交流協会や現地の日本人講師を通じて、２，３ヶ月間～１年間の留学事業の設立
＊ 地域開発、文化、観光推進施策に活躍する日本の行政や団体や機構などと意見交換や懇談会の設立
＊ 経済部門の交流やビジネス起業・管理・教育・人材育成、セミナーや会議開催の支援
＊ 文化面では、芸術家の交流（ルーマニア人作家が武蔵野を、そして日本人作家がブラショフ市を訪問して、現地の事情や風景について書く）、文化管理交流、
＊ 在ブカレストの日本大使館ともっと親密に協力し、日本の外務省にも働きかけたら、何らかの形で支援を行ってくださるでしょう。

６）その他、武蔵野市とブラショフ市との交流全般について、ご意見をお願いいたします。

私は、武蔵野市とブラショフ市との間にもっと積極的で活発な国際交流事業を推進することに大

賛成です。

日本文化に大きな興味を示しているにも係わらず、経済的な理由で日本はおろか、近隣国にも行くことのできない多くのブラショフ市民にとって、武蔵野市の貢献は大変貴重なものです。

「市民の会」が提供する奨学金も役立ちますので、日本武蔵野センターと「市民の会」の関係をさらに強化した方が良いのではないかと思います。

ブラショフ市民と武蔵野市民の生活を豊かにする
ために、友好都市の全ての協力者とともに協働し合っていくのが望ましいです。

日本武蔵野センターは、国際協力の参考例、経済部門の交流の仲介、日本とルーマニアとの友好的なコミュニケーションを推進する施設となるように、強く願っている次第です。

日本武蔵野センター利用者アンケート

Musashino Association

No.	質問内容										無効	回答数
	項目1	回答数	項目2	回答数	項目3	回答数	項目4	回答数	項目5	回答数		
Q1	現在参加している活動は？											
	日本語 class	117	図書館利用	27	書道	11	茶道	5	その他	20		5
Q2	これまでに参加した活動は？										参加したい	18
	日本語 class	29	図書館利用	7	書道	12	茶道	2	その他	21	新人には回答できなかった	60
Q3	武蔵野センターをどうして知りましたか？いつ頃から来ていますか？											7
	学校の友人	36	自分のネットワーク	85	県立図書館で	4	インターネット	3				13
	1~6ヶ月前	80	6m~1年前	17	2年以前	24						
Q4	あなたの家族や友達は、武蔵野センターを知っていますか？											
	はい	86	いいえ	2	ある人達は	45						
Q4-2	ご家族や友人は武蔵野センターがNPOであることを知っていますか？											
	はい	101	いいえ	33								
Q5	現在の活動以外に参加したいプログラムがありますか？											
	活け花	15	折り紙	13	料理	3	映画	4	その他」	39	新しい人達がまだ多くよく解らない	78
Q6	どのくらいの頻度で武蔵野センターを利用していますか？											
	ほぼ毎日	12	週1回	96	週2回	22	不定期	4				
Q7	センターに来る目的は？日本語クラス、図書館、情報、インターネット利用など											
	日本語クラス	117	図書館利用	72	友達に会う	2	イベントおよび カルチャークラスなど	26	情報 (含、インターネット)	34		
Q8	武蔵野センタの場所、開館時間はあなたにとって便利ですか？											
	場所：良い	129	場所：不便	3	場所：見つけにくい	2						
	開館時間：良い	123	開館時間：不便	6	開館時間：不満	4						1
Q9	武蔵野センターの活動で嫌いなものは？											
	特になし	105	No.2		No.3						新人はまだなかみが解らない	10
Q10	武蔵野センターのどんな所が好きですか？											
	日本の情報	16	日本語でコミュニケート	50	イベントや図書館が利用できる	27	無料サービス	10	スタッフや雰囲気	12		
Q11	将来日本に行ってみたいですか？											
	勿論	122	**いいえ**	8								4
	奨学生	41	結婚	3	仕事関連	29	観光	100	その他	4		8
Q12	受益者負担をどう思いますか？賛成の方でどのくらいなら負担できますか？											
	賛成	73	**反対**	8							受益者負担の 概念が解らない	53
	10レイ以下	11	10 ~ 20レイ	21	20レイ以上	8					no idea	94
Q13	あなたは、課税総額の2%を指定のNPOに寄付できる新しい優遇税制をご存じですか？											
	はい	85	いいえ	43							新法が解らない人がいる	6
Q14	あなたは、自分の税金の中から、または知り合いに頼んで、この優遇税制を使ってNPO武蔵野センターに寄付したいと思いますか？											
	はい	81	いいえ	11	どちらともいえない	29					新法が解らない人がいる	13
Q15	あなたは、時間、アイディア、ボランティア活動、本、材料、などを武蔵野センターに提供し、或いは試合を紹介したりして、この施設絵を支えたいと思いますか？											
	強く思う	70	そうしたい	57	全然思わない	0						7

注) 今回のアンケートでは、この1月からセンターの日本語初級に関わった人達が沢山おり、まだセンターの活動の全容が解らない人々含まれます。ITセンターは、時間切れで調査から除外しました。 調査実施時期：2006年3月。調査者総数：134人。

日本武蔵野交流センター基本協定書

日本国武蔵野市とルーマニア国ブラショフ市は、日本武蔵野交流センターの設置に関し、次のとおり基本協定を締結する。

1　武蔵野市とブラショフ市は、両市民の友好親善と交流促進を図るために、ブラショフ市に日本武蔵野交流センターを設置する。

2　ブラショフ市は、日本武蔵野交流センターの設置場所を無償で提供する。

3　武蔵野市は、日本武蔵野交流センター設置に伴う費用のうち、開設時に必要な備品、図書及び管理・運営にかかわるものについては、原則として負担する。ただし、細部については、双方協議のうえ別に定める。

4　ブラショフ市は、日本武蔵野交流センターの管理・運営を行う。

5　両市は、日本武蔵野交流センターにおける事業の実施にあたり、それぞれ公共的団体に委託することができる。

6　この協定書に基づく日本武蔵野交流センターの設置について必要な事項は、別に日本武蔵野交流センター実施要綱で定める。

7　基本協定の有効期間は、締結の日から１０年とする。期間の延長については、両市が協議のうえ決定することができる。

以上のとおり合意が成立したことを証するため、日本語及びルーマニア語で基本協定書を作成し、両市長が署名のうえ、それぞれ各１部ずつを保管するものとする。

１９９８年　３月２３日

ROMÂNIA - JUDEȚUL BRAȘOV - MUNICIPIUL BRAȘOV
PRIMĂRIA
PRIMAR

東京都武蔵野市長　　ブラショフ県ブラショフ市長

土　屋　正　忠　　イオン・ギッシュ

日本武蔵野交流センター実施要綱

武蔵野市とブラショフ市は日本武蔵野交流センター基本協定について必要な事項を定める。

1　基本協定第１項に基づき、日本武蔵野交流センターにおいて次に掲げる事業を行う。

（１）文化交流事業の開催

（２）日本語教室開催の援助

（３）図書室の設置

（４）日本及び武蔵野市に関する情報の提供

（５）その他必要な事業

2　基本協定第２項に基づき、ブラショフ市は日本武蔵野交流センターの設置場所として、ブラショフ県立ジョージ・バリティユ図書館分館（Ｂ－ｄｕｌ　Ｅｒｏｉｌｏｒ　ｎｒ．35／2200　ＢＲＡＳＯＶ）の一部を提供する。

3（１）基本協定第５項に基づき、両市は、事業の実施にあたり、それぞれ公共的団体として、武蔵野市は武蔵野市国際交流協会、ブラショフ市はブラショフ武蔵野友好協会及びブラショフ県立ジョージ・バリティユ図書館に委託する。

（２）前号の各団体は、日本武蔵野交流センターの事業実施について協議のうえ実施協定書を定める。

4　第２項に定める場所に日本武蔵野交流センターを設置する期間は３年とする。その期間を経過したときは、両市は、設置場所について再検討をする。

5　この実施要綱に定めるほかに必要な事項が生じた場合は、両市が誠意をもって協議する。

覚　書

この覚書は、武蔵野市（日本国東京都武蔵野市緑町２丁目２番２８号在）とブラショフ市（ルーマニア国ブラショフ市エロイロ通り８番在）によって締結されるものである。

１９９８年３月２３日両市の間で締結された協定（「第一協定」と呼ぶ。）に基づき、また両市の更なる友好関係促進のため、両市は、第一協定を以下の通り改定することに合意する。

第１条　第一協定の中の文言「日本武蔵野交流センター」は、「日本武蔵野センター」に改める。

第２条　第一協定の第２項を次のように改める。

２　両市は、協力して日本武蔵野センターの設置場所を決める。

第３条　第一協定の第４項を次のように改める。

４　武蔵野市は、日本武蔵野センターの全体の管理・運営を責任を持って行う。また、同センター内にあるＩＴセンターの管理・運営は、ブラショフ市が責任を持って行う。

第４条　別添の通り改定する日本武蔵野センターの実施要綱は、本覚書の一部をなす。

第５条　この覚書によって改定される第一協定は、この覚書の締結日から、１０年間有効とする。

第６条　上記以外の第一協定の内容は、本覚書締結後も、変更なく有効である。

両市は、改定の証として本覚書を、日本語、英語およびルーマニア語でそれぞれ２通作成し、両市長が署名し、それぞれが各１通を保有する。

２００４年１１月２２日

武蔵野市長
土　屋　正　忠

ブラショフ市長
ジョージ・スクリブカ

日本武蔵野センター実施要綱

武蔵野市とブラショフ市は、第一協定第６項および覚書第４条に基づき、日本武蔵野センターの必要事項につき、以下の通り合意した。

1　第一協定第１項に基づき、日本武蔵野センターにおいて次に掲げる事業を行う。

(1)　文化事業の開催
(2)　日本語教室の開催
(3)　図書室の設置・運営
(4)　コンピュータ教室の開催
(5)　日本および武蔵野市に関する情報の提供
(6)　その他必要な事業

2　第一協定第２項に基づき、武蔵野市は、マークテレコムビル（マテイ・バラサブ通り２番地）の中の日本武蔵野センターに相応しい場所を賃借する。武蔵野市は、賃借料を負担するものとし、ブラショフ市は、ユーティリティの経費（光熱費、水道代、通信費）を、負担するものとする。

3　本実施要綱第２項に定める場所に日本武蔵野センターを設置する期間は、2008年４月までとし、その以降については、両市が協議の上、決定する。

4　第一協定第４項および覚書第３条に基づき、武蔵野市は、日本武蔵野センターを管理・運営するために、センター所長を駐在させる。

5　本実施要綱に定めるほかに必要な事項が生じた場合は、両市は誠意を持って協議する。

第５回ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会　会議要録

■　日　時：平成 18 年３月 14 日（火）　午後７時～８時 30 分
■　場　所：総合体育館３階　大会議室
■　出席者：石光委員・大隅委員・河北委員・竹島委員・原委員・平井委員
横尾委員・頼委員（五十音順）
事務局３名、傍聴者３名

１　配布資料説明

＜事務局説明＞

２　議事

【委員長】本日でまとめる方向にて行いたい。これらの意見を報告書に反映していきたいと考える。資料について事前に副委員長にも目を通してもらったので、副委員長に説明をお願いしたい。

【副委員長】歴代のセンター駐在員と現地雇用職員の意見の概要をまとめてみると、センターで行っている日本語教室や日本文化紹介活動、市民団による文化交流に関しては皆同様に良い評価である。今後のあり方については、武蔵野市民の理解や協力が必要、ＩＴセンターのＰＣをもっと活用すべき等の意見がでている。立地条件については、あまり良くないという意見もあるが、センター利用者のアンケートには、良いという意見がほとんどである。交流全般に関する意見では、相互に対等の立場での交流を目指すべきだという意見がある。現地雇用職員からは、今後のあり方について、財源として、ルーマニアでの割り当て寄付制度（所得税の２％をＮＰＯに割り当て寄付できる制度）をセンター利用者にもっと呼びかけてはどうかという意見や、現地の関係団体との協働による文化プログラムは、センターの寄付金へのきっかけになるとの意見があった。また、日本語講座受講者の留学事業の新設、文化・観光分野などでの日本の行政や関係団体との意見交換の場の設置、経済部門の交流、両国の作家がお互いの国のことを書き合うといった文化交流の提案があった。また、経済的理由で近隣国にも行くことのできない多くの市民にとって、武蔵野市の貢献は大変貴重である。研修生の招聘に関して、武蔵野ブラショフ市民の会との関係をさらに強化した方がよいとの意見があった。

【委員長】これらの意見を報告書に反映していきたいと考える。次に市民意見についてだが、委員の意見を伺いたい。

【委員】市民意見の№４の②についてだが、配布資料の基本協定書（1998 年）第４項にもあるように、センターの設置当初、センターの管理・運営はブラショフ市が責任をもって管理するとのことであった。しかし、うまく機能しなかったため、所長（当時は協力員）が派遣された。現状ではブラショフ市との覚書（2004 年）に基づいた実施要綱の第

４項のとおり武蔵野市から所長を派遣している。現地の人間でしっかり管理してくれる人材がいるならいいのだが、なかなか実情は難しいと思う。両市で設立した施設でもあるので、所長の派遣は必要ではないかと思う。続いて④についてだが、ＪＩＣＡの活動分野としては日本文化はあるが、日本語教師のカテゴリーはない。ブラショフ市から依頼されて日本語教室を行っている経緯もあるので、武蔵野市が責任をもって行わなければならないと思う。仮に現地のルーマニア人や、現地に住んでいる日本人の中に日本語指導のスキルをもった人がいれば、現地レベルの給与で行えば良いと思うが、当面はなかなか難しいのではないか。

【委員】実際にそうした人材を探したことはあるのか。

【委員】ない。しかし、現在日本語教師として派遣されている職員が、ルーマニア人の学生をアシスタントとして利用したことはある。授業をルーマニア語で行った方が理解しやすいためである。ボランティアとしたが、交通費ぐらいの支給はあったと思う。

【委員】現地に住んでいる日本人に日本語教師をお願いする場合、資格の有無はどうなのか。

【委員】やはり言葉というのはネイティブだから良いというわけでもない。例えば、市内のＡ大学では、資格を持った人にしか英語を教えさせない。最初に間違った知識をインプットされると、なかなか直らない。そういったことからも、教える人にはある程度の資格が必要ではないか。

【委員】今後、現地化するのであれば考慮するべきだと思う。

【委員】現地の学生をボランティアとして活用するということは、両市民でセンターをつくっていく「相互交流」ということからも良いことだと思う。

【委員】そういった場合、どこまで仕事をお願いするか考える必要がある。基本的にはアシスタントとして、日本人とセットで行うことはいいことだと思う。

【委員】日本語教室を始めたとき、現地の人を日本語教師に育成する試みはしなかったか。

【委員】はじめは、３年間で現地の人間を日本語教師化するという目標だったが、実際には難しかった。本人が日本語教師になりたいという気持ちがないとうまく育たない。彼らは、日本語教師というよりも他の仕事に日本語を利用したいと考えている人が多く、日本語教師という仕事が魅力的かどうかはわからない。

【委員】最近は日本人観光客も増えているので、通訳等の仕事も増えるのではないか。また、日本語教師という仕事を他の仕事より高い報酬にすれば変わるのではないか。センター長の経費の面も問題だが、現地に所長にふさわしい人はいるのか。お金がかかるから派遣をやめるというのでは、せっかく今まで機能してきたものがなくなってしまう。

【委員】お金の問題というよりは、適切な人間がいたら考えるということではないか。

【委員】確かにセンター長にはいろいろな要素が求められる。

【委員】センター長イコール日本人と固定する必要はないと思う。日本語教師についても同じである。ただ現状では、日本からの派遣もやむをえないと思う。

【委員長】続いて№５の市民意見について議論したい。
【委員】②について、前回の懇談会で提案した事務局新設というのは、あくまでもボランティアでと考えている。チェック機能ではなく、ルーマニア交流についてのサポートという意味である。
【委員】これまで、とても多くの経費が武蔵野市民の税金で賄われている中で、ブラショフ市民には恩恵があるが、武蔵野市民にはあまり知られていないし恩恵がない。そのような中で、新設する事務局が適切に機能していけるのか不安である。
これまで 10 年以上も交流をしてきたが、市民にはあまり知られていない。墨田区にあるルーマニア観光局を利用してみてはどうか。タイアップして市民にＰＲをしていく。武蔵野市民にとってはブラショフ市という観光地を安心して旅行できることはメリットであるし、ブラショフ市にとっては、武蔵野市民が観光に訪れることで潤い、喜ぶと思う。そうした観光局を武蔵野市に置くことの方が、事務局を新設することよりも市民には喜ばれるのではないか。
また、日本語教師についてであるが、ＪＩＣＡが無理であるなら、しっかりとした人を日本語教師として派遣していく必要があると思う。
【委員】事務局を新設しても家賃等の経費がかかる。市役所の交流事業課の中で文通仲間の斡旋をし、現地と連絡を取り合うようなものなら賛成である。
【委員】事務局を新設するのであれば、もっとしっかりとしたものが必要だと思う。各団体から代表をボランティアで年４回集めるということで、どれほどの効果が望めるのか。武蔵野ブラショフ市民の会とのパイプ役にはなると思うが、市民に還元されるかというのは難しいと思う。市役所のほうで基本路線をしっかりしないうちに事務局を新設しても難しいと思う。
【委員】若い人が自発的に交流に関われる場をつくることは、必要だと思う。
【委員】事務局という名はともかく、そうした交流のネットワークをつくるのは必要と考える。
【委員】事務局新設の提案もネットワークの核の一つだと思う。経済や文化交流ではなく、市民交流がメインのはずである。いろんな人が関わる核になるネットワークが必要。観光局や文通仲間の斡旋などを含めて、事務局というのは何らかのネットワークの核になると思う。
【委員】人を置いたり、何回か集まるということではなく、ネットワークを動かしていくルールが決まればよいと思うので、会合なしでインターネットにてやり取りすることでいいと思う。
【委員】今回いろいろな意見が出たが、今後どうしていくかは市役所の交流事業課任せではなく、事務局を新設し、いろんな集まった意見を集約し、今後の交流につなげていく、そうした原動力が必要だ。今は市が中心であるが、ボランティアを含めて市民のエネルギーの集合が必要だという思いがある。

【委員】市役所と現地のセンター所長で十分対応していけるのではないか。組織をたくさんつくる必要性はないと思う。

【委員】今の意見と同じで市役所で十分かと思う。市民が貴重な時間を割いて行うのは、無意味なのではないか。市民参加のイベントについては、武蔵野ブラショフ市民の会でもやってきている。ペンフレンドもいいと思うが、絵手紙の活動もずっと続いていて、新聞に記事が載ったこともある。ＮＧＯには、自由にさせてほしいという思いがある。国際交流協会や市の下部組織ではなく、独立した活動団体である。独自の活動をしたいと考えているので、そのような事務局が新設されても何ができるのか困ってしまうし、市民の会としてのメリットは感じられない。必要に応じ市に協力するが、独自の活動をするという今のスタイルのままでいい。

【委員】それぞれの活動団体でカラーが違うのは十分わかる。必要に応じて市に対し協力、独立していくということであり、無理に融合していく考えはないということだと理解している。

【委員】今までどおりに市民に広がるような活動をし、市から紹介を受ければ協力していきたいと考える。

【委員】懇談会であるので、賛否両論あって当然だ。

【委員】新しい組織をつくる必要はないと思う。いろいろな組織の独自の活動をつなげるネットワークで十分と考える。

【委員】センターの建物の賃貸借契約の契約期間は５年間で、2008 年にきれるので、2008 年が考え直すチャンスになると思う。経費についてだが、武蔵野市が毎月 150 万円くらい使っている一方、ブラショフ市の支払いは、センター長と日本語教師の家賃、センターの光熱費・通信費・清掃費などで数百ドルか数百ユーロ、だいたい 10 万円前後は負担している換算になる。財政力の違いを考えると、これ以上の負担は求められないのではないか。そこで 2008 年以降については、今の建物を借りるのではなく、ブラショフ市のもっている既存の建物をリメイクして利用することも考えていいのではないか。長期に借りているより買った方が安いのならば、センターは現地の法人格を取得しているので、不動産を取得することも可能である。長期的な検討課題として考える必要がある。

【委員】家賃は毎年スライドしているが、このまま増えていくということか。

【委員】当初はドル契約であったが、2004 年に翌年からユーロで支払ってもらいたい旨の要求があった。ユーロ高を考えると、単純に武蔵野市の負担が 2005 年から２割増したことになる。契約変更の交渉ではいろいろ苦労した。

【委員】先ほどの事務局新設案に一つ賛成な事は、ブラショフの現地の責任者は一人でとても大変だと思うので、この事務局がいろいろな面でサポート部隊になるのではないかということだ。日本から遠いので、現地との交渉にも立場が弱いと思われる。そうしたことをサポートする意味で良いのではないかと思う。

【委員】それはまさしく市の仕事と思う。

【委員】市もブラショフについて特別の知識があるというわけではない。少ない情報の中で運営していくのが不安である。そうした意味でブラショフ市と対等にやりあえる枠組みが必要なのではないか。
【委員】方向、具体的に前に進める方法論を決めるのが、役所の仕事であると思う。全部を市がやるべきと言っているわけではない。
【委員】センターについて今まで知らなかった情報、例えば賃貸借契約などを知ることができた。市の交流事業課はさらにセンターと密に連絡を取り合ってほしい。
【委員長】№６の市民意見についてはいかがか。
【委員】経済状況の違いから、交流が支援を中心としたもの、支援の延長上になっている。それが武蔵野市にとって重荷になっていると思う。援助支援的交流から、将来両市が対等の相互交流をしていく努力について報告書に入れていくのはどうか。センター利用者のアンケートにも、ある程度の受益者負担を受け入れてもいいという意見がある。センターを支えたい人も多いはずだ。ブラショフ市も武蔵野市に対して何かしたいとの考えがあると思う。
【委員】アンケートにあるように、少しでも授業料や使用料を支払ってもいいと思う人がいるのならば、交流の次のステップに進むためにも、支払ってもらうことは必要でないか。
【委員】このアンケート結果を見て驚いている。生活レベルで中流以上の人が、センターに来ているということがわかる。日本語教室などについて、受益者負担としてお金を払う方が、払ってまで来ている分、しっかりと続けられる面もあると思う。
【委員】アンケート回答で最低金額として出ている、10 レイくらいを支払ってもらうといいのではないか。
【委員】授業料としてとると定款に触れるので、教材費として負担してもらうなら可能ではないか。
【委員】今は、教材代も無料なのか。
【委員】コピー代は取っている。
【委員】アンケートのＱ15 に時間・アイデア・ボランティア活動などを提供とあるが、提供したいと思う人が多い。そのような人は、人材活用の受け皿になると思う。
【委員】アンケートの回答者の年齢層はどのくらいなのか。
【事務局】中心は大学生くらいの年齢層だが、小学生から高齢者までいるとのことだ。
【委員長】報告書のたたき台について、全体を通して意見はあるか。
【委員】目次の１の「はじめに」を「目的」としてほしい。委員メンバーを掲載し、委員の任期についても掲載すべきだ。２の（３）「検討課題」は、これから検討していくようであるから、「現状認識」、もしくは「問題認識」とするのが適当だと思う。３の（１）の１～２行目「それぞれに意義があり、」とあるが、これは具体的に書く必要がある。３の（１）の３段落目の「広報」については、別の項目をつくってＰＲ活動として記載す

べきだ。また同じく、経費についても別項目とすべきだ。３の（２）は、どのような切り口から評価しているのか、ポイントを列記するべきだ。３の（４）アに「日本への留学や日本関連ビジネスへの就職のチャンス」とあるが、たくさんチャンスがあるように誤解させてしまうのではないか。また、経費に関する記載もあるが、この内容は経費の項目にまとめるべきである。３の（５）に「交流の核になる」とあるが、核ではないはずである。また、具体的活動として、①～③とあるが、市民交流や広報といったもっと大きなカテゴリーでくくるべきと感じる。

【委員長】他に意見はないか。

【委員】４の「おわりに」について、懇談会としてこれからに向けたもっと発展的な締めくくりにした方が良いと思う。

【委員】本日の懇談会の内容をまとめ、報告書の締めくくりにしたらいいと思う。

【委員】「おわりに」は、「今後に向けて」としたらどうか。

【委員長】本日の意見を参考に報告書をまとめたい。再度、懇談会を開催するかどうかは、まとまった報告書を各委員に確認していただき、その後、各委員の意見を事務局でまとめてもらい、その反応をみて委員長が判断したいがいかがか。

＜全委員、異議なし＞

【委員長】なお、仮に開催するようなら３月 28 日（火）に予定したい。以上をもって第５回の懇談会を終了する。